

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

古い和本をひるがえしていると、ときおり本のあいだに木の葉のはさまれているのを見つけることがある。どれほど古いものなのか、手にした葉は乾ききって、もう元の色をとどめてはいないが、その輪郭を見れば、これは銀杏いちょうの葉、これは朝顔の葉だというように見分けはつく。

本に木の葉をさしはさんだりするのは、べつに珍しいことではない。

名勝の地を訪れたおり、庭園に落ちていくきれいな一葉をひろって、ささやかな記念としたり、落葉の四季に、**①**象牙に黄をにじませたような銀杏の葉や、窠菱よへんの色を思わせる紅葉の葉を手にして、読みさしの本のあいだにはさんだりするのは、よくあることだろう。後日、たまたまひらいた本のあいだに、色褪あせた一葉を見つけて、かすかになった記憶をしばしたどったりすることもまた……。

②そのとき手にしていた本は、しかし、風雅をこととするような本ではなかった。伊藤仁斎いとうじんさいの『童子問どうじもん』。学問の道筋と心構えを懇切をきわめて講じた、三巻からなる木版本だった。木版本の場合、本に記載された日時が、実際の刊行時期と異なることがあるそうだから、その本も実はそれほど古いものではないのかもしれないが、奥付けにあたる最後の一段には、宝永四年ほうえい（一七〇七年）とあった。

行間や上部の欄外に、朱をまじえた丁寧な細字で、おそらくは子弟のためと思われる書き入れがなされてあり、はるか後世のおぼつかない後

学には、それがことのほかありがたかった。その書き入れにはまた、もうひとつ別の効用もあった。読んでみると、何事もゆるがせにしない古人の精神が乗り移りでもしたもののか、こちらはいくらか肅然とした気持ちになるのだ。

はじめ、木の葉のはさまれているのを目にしても、さして気にはならなかった。二つ折りにして綴とじられた紙のすきまに、葉はひそませるようにはさみ込んである。しばらくするうちに、どうもそれが尋常ではないような気がしてきた。二、三丁めくると、必ずひそませてある葉が、薄い和紙を透かして見てとれる。とても何かのよすがに、などというものではない。いったい誰が何のためにと考えているうちに、次々と見つかるその黒ずんだ葉が、何かいとわしいものに思えてきて、見つけ次第、窓から投げ棄すてていった。木の葉は実に久方ぶりに、戸外を吹きすぎる風に舞ったことになる。

それにしても、なぜこんなふうに、葉を執拗しつようにはさみ込んだりしたのだろうという疑問は、しばらく胸にわだかまっていたが、風に飛び去った木の葉のように、それもいつしか忘れてしまった。もう何年も前のことだ。

ところが最近、たまたま荷風の随筆『冬の蠅はえ』所収の「枯葉かれはの記」を読んで、次のような一節にいたったとき、図らずもその疑問は氷解したのであった。

「古本を買ったり、虫干むしほしをしたりする時、本の間に銀杏や朝顔の葉のは

さんだままに枯れてゐるのを見ることがある。いかなる人がいかなる時、蔵書を受するの余りになしたとか。その人は世を去り、その書は転々として知らぬ人の手より、また更に知らぬ世の、知らぬ人の手に渡って行く。紙魚しみを防ぐ銀杏の葉、朝顔の葉は、枯れ干されて、紙魚と共に紙よりも軽く、窓の風に翻ひるがへって、行くところを知らない。」

そうか、あれは紙魚を防ぐためのものだったのか。ひとたび分かってみれば、そんな自明とも思われることになぜ気づかなかったのか、我ながら不思議なほどだった。まことに、ものを知らない人間には知る喜びがある。あの枯葉は、はるか昔、今よりもずっと貴重であった本をいとおしんだ心遣いの、かすかな痕跡であったのだ。丹念に木の葉を本のあいだにさしはさんでいた、さも克明そうな人物にたいして、親しみに似た感情を覚えはじめた。あるとき風に飛ばしてしまった枯葉をさえ、③にわかに惜しむような気持ちになった。

(鶴ヶ谷真一『書を読んで羊を失う』による)

(注) 象牙 Ⅱ ここでは、薄いクリーム色のこと。

窯変 Ⅱ 窯で陶磁器を焼いた時に起こる、予期しない色などの変化。

風雅 Ⅱ 風流で優美なこと。

伊藤仁斎 Ⅱ 江戸時代の儒学者。

丁 Ⅱ 書籍の紙数を数える語。

後学 Ⅱ 学問・技芸などで、先人のたどった道をあとから進むこと。またそのような人。

ゆるがせにしない Ⅱ おろそかにしない。

よすが Ⅱ 機会。

荷風 Ⅱ 永井荷風ながい。明治期から昭和期の随筆家・小説家。

紙魚 Ⅱ 和紙・書籍などを食いあらず、体長一センチメートル程の平たく細長い虫。

問 1 次のうち、本文中の ① に入れるのに最も適していることばは

どれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア まさか イ どうして ウ まるで エ たとえ

問2 ② そのとき手にしていた本とあるが、次のうち、この本を読んでいる

ときの筆者について、本文中で述べられていることがらと内容の合うものはどれか。最も適しているものを一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 本の間にはさみ込まれている色褪せた一葉を見つけて、自分がその葉をはさみ込んだときのかすかな記憶がふと思い出された。

イ 本に葉がはさみ込まれていることは珍しいことではないが、古い

木版本が葉のはさみ込まれた状態で残っていたことに驚きを感じた。

ウ 本の間から次々と葉が見つかり、名勝の地を訪れたおりや落葉の時季など、何かのよすがとしてはさまれたものではないと思えてきた。

エ 行間や上部の欄外に書き入れをしながら読んでいくうちに、学問の道筋と心構えや古人の精神を理解することができ、肅然とした気持ちになった。

問3 ③ にわかに惜しむような気持ちになったとあるが、筆者がこのよ

うな気持ちになった理由として、本文中で述べられている内容を次のようにまとめた。

a

に入る内容を、本文中のことばを使って

二十字以上、三十字以内で書きなさい。また、

b

c に入

れるのに最も適しているひとつづきのことばを、それぞれ本文中から抜き出しなさい。ただし、

b

は九字、

c

は六字で抜き出すこと。

「枯葉の記」の一節にいたったとき、かつて筆者が手にしていた『童子問』の間に

a

ということが分かり、

b

と思えて風に飛ばしてしまった枯葉は、はるか昔の人物が今よりもずっと貴重であった本をいとおしんだ

c

であったと思っ

たから。

[illegible]

問 1 () ア イ (ウ) エ ()

問 2 () ア イ (ウ) エ ()

問 3 a (例) 『童子問』の間にはさみ込まれていた葉は、紙

魚を防ぐためのものだったということが分かり、

b 何かいとわしいもの

c かすかな痕跡

〈備考〉 問 3 a 部分点を与える。

問1

ポイント

ア、エの言葉は、それぞれ呼応の副詞（陳述の副

詞）である。①の後には、「……ような」と、比喩を示す表現があるので、ウ「まるで」がふさわしい。

問2

「そのとき手にしていた本」とは、傍線部直前にある「後日、たまたまひらいた本」のことである。この本を読んだときの様子として「はじめ、木の葉のはさまれているのを目にしても、さして気にはならなかった」が、「しばらくするうちに、どうもそれが尋常ではない」と感じるようになっていく。第二段落で説明しているように、「名勝の地を訪れたおり」や「落葉の時季」に「本に木の葉をさしはさんだりするの、べつに珍しいことではない」と筆者は述べている。しかし、「そのとき手にしていた本」にはたくさんはさまれているので「尋常ではない」と思ったのである。したがって、ウが正解となる。

問3

「にわかに惜しむような気持ち」とは、『童子問』にはさまれていて、「風に飛ばしてしまった枯れ葉」に対する気持ちである。aの直後には、「……ということが分かり」とあるので、aには「枯れ葉」がどのようなものであったと分かったのかを説明した内容が入る。荷風の随筆を読んだ後「そうか、あれは紙魚を防ぐためのものだったのか」とあるのを手がかりにして、「あれ」が何を指すのか明確にし、適切な形にまとめて解答する。b・cには、枯れ葉の正体分かる前と後の枯葉を指す表現を探して抜き出す。